農研機構 農村工学研究部門

分布：本州・四国・九州

ウラジロチチコグサ（ キク科 ）

学名：*Gnaphalium coarctata*（グナファリウム コアルクタータ）

裏白父子草　　別名：アメリカチチコグサ

主な生育場所

田畑の畦、道ばた、堤防、芝地、公園、庭先、果樹園、荒れ地、植え込みの下、コンクリの隙間など。種子が風散布されるので、乾いていて日が少しでもあたる土地ならどこでも侵入・生育する。

名前の由来：チチコグサ（右下写真）に似て、葉の裏面がチチコグサよりも白く見えることから裏白チチコグサ。また別名は、南アメリカ原産から。

特 徴

南アメリカ原産の多年生。高さ30～80cmほど。茎は基部から短く横に這って分株をつくる。葉はヘラ状で表面は光沢のあるやや明るい緑色，裏面には密着した白毛が密生し，白く見える。ロゼット葉で越冬。茎につく葉の縁は波打つ。茎の上部に多数の花を集めた頭状花をつけ，総苞片は光沢のある緑色。種子には冠毛がある。

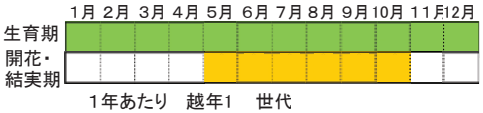
初夏から秋にかけて長期間開花がみられる

＜農業との関係＞

基部から枝分かれし，地面に張り付くように密に分株を形成しながら広がり、踏みつけや刈り込みに対しても強く，果樹園や畑地，芝地で害草となることがある。また除草剤に対しても枯れにくいことから，ゴルフ場などでは近年増加しているようだ。ただし，耕起には弱く頻繁に作付けするような畑には見られない。

ロゼット葉の裏面には密な白毛があり白い

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



1年あたり　越年1　世代

＜類似種＞チチコグサの葉は線形でウラジロチチコグサよりも細い。また葉の裏面はウラジロチチコグサ同様白っぽくなるが，葉の表の色は濃緑色。チチコグサモドキの葉は幅広いが葉の裏面はあまり白くならず，葉の表面にふんわりした毛が多い。

＜一言うんちく＞

チチコグサの仲間には外来種が多いのですが，最近（昭和40年代後半ごろ）定着するようになった新参者です。急速に分布を拡げており，他のチチコグサの仲間よりも花期が長く遅くまで花をつけていることから，各地の庭先などにも葉の裏が白いロゼットが目立つようになってきました。

チチコグサとチチコグサのロゼット（左下）

＜人との関わり合い＞

同属のハハコグサは春の七草のひとつとなっていますが，同じように在来種であるチチコグサや外来種のウラジロチチコグサなどを食べたり薬用に利用した記録はない。ただ，庭先などで冬期に光沢のある明るい緑色の葉を広げているロゼットの姿はよく目立ち，名前は知らずとも憶えのある方も増えてきているのではないだろうか。お正月飾りに使われるウラジロなどに通じ，どこかすがすがしさや縁起物を感じさせてくれる草花である。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春　※チチコグサ】ウラジロチチコグサの季語は不明。

父子草父の寡黙をわれも享く（椎木万紀子）　　たまさかに子と野に出れば父子草（轡田 進）

けぶれるは羅漢の山の父子草（原田 喬）　　父子草母子草その話せん（高野素十）

父子草もどきが飛ばす梅雨の絮（青木重行）

分布：全国

コナギ　（ミズアオイ 科）

学名：*Monochoria vaginalis* ver. *plantaginea*（モノコリア ヴァージナリス　プランタギニア）

小梛　　別名：ナギ，ミズナギ，イモグサ，ツバキグサ，ハート草

主な生育場所

かつて原産地の東南アジアから稲作とともに伝わってきたイネの随伴植物とされ，日本では水田や休耕田など，水田周辺にしか生育しない。種子寿命は長く，耕作放棄田でも復田すると発生してくる。

名前の由来：同属のミズアオイとともに，マキ科の樹木である梛（なぎ）の葉に似ていることからナギ。ミズアオイよりも小型のため，コナギ（小梛）。またサツマイモの葉にも似ているためイモグサ。

特 徴

嫌気的条件下で発芽する一年生の単子葉植物。線形の子葉に続き，やや広い線形葉が数枚展開し，光沢のある卵形あるいは心臓形の葉をつける。大株はやや横に這う。夏～秋に葉腋に短い花茎を伸ばし青紫色の6弁花を房状に2～8個ほどつける。開花後花茎は垂れ，多数の種子を含む長さ1cmほどの楕円形の果実をつける。

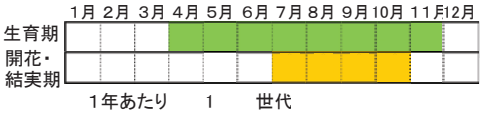
水田のコナギ（右下：マキ科の樹木ナギの葉）

＜農業との関係＞

ノビエと並び，稲作で見られる代表的な雑草。草高は低く，10～30cmほどだが，窒素等の吸肥力が高く，密生するとイネの生育が抑制されるため，古来から強害雑草として除草の対象となってきた。大株になると根が強く張り，除草に苦労するため，芽生えたばかりのコナギを這いつくばり取っていた。しかし，戦後の除草剤の普及により，今では有機農業などの水田以外はあまり見かけない。

幼植物（やや幅の広い線形葉）

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



1年あたり　1　世代

＜類似種＞

北日本に多いミズアオイは，湖沼や河川にも見られ，コナギより大型で葉の上まで花茎が伸び，総状に径2.5～3cmの花（コナギの花は径1.5～2cm）をつける。外来種のアメリカコナギは西日本に多く，葉は細長く基部は心形にならない。

コナギの花

＜一言うんちく＞

語源となった梛（ナギ）は熊野神社の神木とされ，風ぐや難ぐと通ずることから，船乗りを中心にその葉を身につけ災難除けや厄除けとしていました。またコナギの葉と同様に平行脈で縦方向には裂けにくいことから，夫婦円満の象徴ともされます。コナギも同じ効能があるかも知れません。

＜人との関わり合い＞

コナギは，イネの栽培に伴って大陸から渡ってきた水田雑草で，万葉集などにも登場するなど，古くから馴染みの植物である。ミズアオイも含む「ナギ」は，平安時代ごろまでは食用として栽培され，今でも東南アジアでは食することがある。最近，コナギを栄養分析した結果，ビタミンやミネラルが多く含まれ，野菜として栄養価が高いことが報告された。そのため，改めて食材としての価値が注目されている。また，中国では民間薬にも利用され，解毒，鎮咳作用から，高熱，喘息などに用いられる。

＜俳句や短歌への登場＞

【小水葱（こなぎ）の花：秋】　母の里へ辿る稲田のこなぎかな　（松瀬青々）

苗代の　子水葱が花を衣に摺り　馴るるまにまに何か愛しき　（詠み人知らず）『万葉集』

春霞　春日の里の　植子水葱（うゑこなぎ）苗なりといひし　枝はさしにけむ」（大伴駿河麻呂）『万葉集』

おのれまで恋路にぬれて苗代のこなぎがもとに鳴くかはづかな　（藤原知家）

ホームページからでも単体で草花のファイルを御覧いただけます。
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/mail_magazine/genre/kusabana.html

農村工学研究部門メールマガジン

農村の草花

記事・タイトル	配信No.	配信年月
初夏の木陰で咲く花は雪のごとし～ユキノシタ～	第145号	2022年6月
直立した茎に鈴なりに特徴的な果実をつけるおなじみの草には、いつのまにか仲間がいっぱい? ～ギシギシ～	第144号	2022年5月
緑風に揺れるあの可愛らしいヒナゲシの花は、危険な侵略種 ～ナガミヒナゲシ～	第143号	2022年4月
寒風のなか、ひたむきに咲く冬の花 ～サザンカ～	第139号	2021年12月
いつの間にか衣服に貼り付いているまるで盗人のようなあの草は? ～ヌスビトハギ～	第138号	2021年11月
お灸や草もち、薬用に大活躍。身近な有用植物 ～ヨモギ～	第137号	2021年10月
刈跡や畦畔で秋風に揺れる小さなトウガラシ? ～アゼトウガラシ～	第136号	2021年9月
古池に浮かぶ小判のような水草はなんともつかみどころがない? ～ジュンサイ～	第135号	2021年8月
藪の中でひっそりと咲く花の「隠された心」とは～ヤブラン～	第134号	2021年7月
この草の上なら転んで擦り傷をこさえても血が止まる!? ～チドメグサ～	第133号	2021年6月
夜の路傍で月を見上げているあの草は? ～コマツヨイグサ～	第132号	2021年5月
タンポポの変異?いえいえ、そっくりだけど別種の外来種です～ブタナ～	第131号	2021年4月
難を転じて福となす 来年度は人々が集い談笑し合える年になりますように ～ナンテン～	第127号	2020年12月
ガーデニングなどでお馴染みのあの草は咳止めの薬草だった ～リュウノヒゲ～	第126号	2020年11月
中国最古の薬物書にも登場し、今でも日常的に飲用するスーパー健康食品 ～チャノキ～	第125号	2020年10月
楊貴妃が愛し、あの名著にも登場する赤い実は不老長寿の薬 ～クコ～	第124号	2020年9月

「農村の草花　2022年秋のオンライン一般公開版」
農研機構　農村工学研究部門
https://www.naro.go.jp/laboratory/nire/

分布：全国

キキョウ　（キキョウ　科）

プラティコドン　グランディフロルス
学名：Platycodon grandiflorus

桔　梗　　別名：キチコウ，おかととき，アリの火吹き，桔草（コウソウ）

主な生育場所

草原や，山間部の水田などに隣接する斜面林の裾刈り草地，ため池の堤体法面など，定期的に草刈りされるような日当たりの良い草地にみられる。観賞用に庭や公園などに植栽されることも多い。

特　徴

太い根茎を持つ多年生。茎は直立し高さ0.5～1mほど。卵形～狭卵形の葉には鋭い鋸歯があり互生，ときに輪生状。葉裏は粉白色を帯びる。夏から秋にかけ茎先に青紫色の径3～5cmほどの広鐘形で5裂する花を数個つける。園芸種には白花や八重咲などがある。花後，果実が熟すと上部が5裂し，翼のある多数の種子を吐き出す。

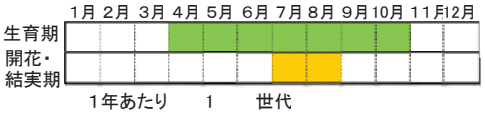
名前の由来：漢名の桔梗をキチコウと呼んでいたものが，キキョウに転訛した。トトキとは同科のツリガネニンジンの異名。また蟻のギ酸に触れると花弁が赤く染まることからアリの火吹き。

＜農業との関係＞

畑地などで雑草となることはない。しかし，日照を確保するための水田わきの裾刈り草地やため池堰堤，世界農業遺産に認定された静岡県の茶園周辺にみられる良質茶生産のためのススキ敷草を確保する「茶草場（ちゃくぐさば）」など，農地周辺の程よく草刈りされている草地でよく見られ，里山ではワレモコウなどと同様に農業に伴う草刈りに依存している草原性の植物の一種といえる。

ため池の堤体法面にワレモコウなどと咲くキキョウ

＜生活史＞　　関東 地方の例（目安）



＜類似種＞同じような草地に生えるツリガネニンジンは3-5枚の葉を輪生し，円錐形の花序で狭鐘形の花を輪生。リンドウの花期は晩秋で，葉は3脈が目立ち対生で先がとがる。また花色は紫色で先が浅く5裂するが筒状，葉脇にかたまってつく。

＜一言うんちく＞

古くから親しまれるキキョウの花は家紋の意匠としてもよく用いられます。明智光秀をはじめ，美濃の土岐一族の桔梗紋は有名ですが，平安時代の陰陽師，安倍晴明が用いた魔除けの呪符である五芒星は，五裂するキキョウの花に見立てられ，「晴明桔梗」として神紋にも使われています。

さまざまな意匠の桔梗紋
中右：土岐桔梗，右下：晴明桔梗

＜人との関わり合い＞

秋の七草で朝顔とあるのはキキョウとされ，身近にみられる青紫の大きな花は昔から観賞用として愛でられ，江戸時代以降，多くの園芸種も生まれた。またキキョウの花のような青みを帯びた紫色は伝統色「桔梗色」にもなっている。しかし，里山の荒廃に伴い，適度に管理される草地が減少したことら，現在では野生のキキョウは，絶滅危惧種に指定されるほど少なくなってしまった。また，根に多くサポニンを含み，生薬にも利用され，鎮咳，去痰，排膿作用がある。若芽や根は水に晒し食用にもなる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：秋】 こいまろび恋は死ぬともいちしろく色には出でじ朝顔の花 （詠み人しらず）『万葉集』 ※朝顔＝キキョウ
きりきりしやんとして咲く桔梗かな（小林　一茶）　白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けきに似て （若山　牧水）
椎の樹に蜩鳴きて夕日影ななめに照すきちかうの花 （正岡　子規） 草刈の籠の目を洩る桔梗かな （夏目　漱石）
きちかうのむらさきの花萎む時わが身は愛しとおもふかなしみ （斎藤　茂吉）

分布：全国

クコ　（ナス科）

学名：*Lycium chinense*（リキウム シネンセ）

枸杞　別名：ゴジベリー，ウルフベリー，カラスナンバン，カワラホオズキ，しこ

主な生育場所

日当たりの良い人里近くの堤防や荒れ地，路傍，薮などに見られ，山地ではみかけない。市街地や庭先などに植栽されることも多い。やや湿った水辺を好み，海岸沿いの砂地や溝の中にも生える。

特徴

1～2mほどの落葉低木。細長い枝を株元からよく分枝し斜上して薮状となる。楕円形の葉は互生し，長さ1.5～6cm，幅0.5～2.5cmほど。葉の付け根に小枝状の棘ができやすい。夏から秋にかけて葉腋から細い花柄を伸ばし直径1cmほどで長い雄しべが目立つ薄紫色の花を1～3個つける。果実は赤く熟し，楕円形で長さ1.5cmほど。

ヤナギのような枝葉で葉の基部に棘がある

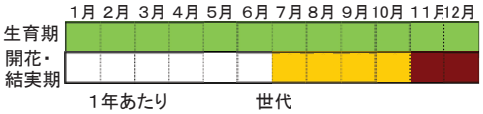
名前の由来：中国名の「枸杞」を音読みし，クコ。「枸」とはカラタチ（枸橘）を指し，「杞」はコリヤナギ（杞柳）のこと。カラタチのようにトゲがあり，コリヤナギのような葉や枝を持つことから。

＜農業との関係＞

河川敷などでは薮となり雑草化することも多いが，耕起には弱いので耕地内で見ることはない。粗放的な管理の果樹園や休耕地，耕作放棄地ではときに繁茂がみられる。また，畦畔や農地わきに植栽されると，ほふく茎によって株を増殖し農地に侵入しやすくなるので注意が必要である。また薮状になると，棘によって刈り払いなどの管理がしづらくなる。

ナスの花を小さくしたような薄紫色の花

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



＜類似種＞ クコと同様に路傍や原野などに生え，よく似た赤い実を付けるに樹種にグミ（グミ科）の仲間があるが，グミの葉の裏は銀色の鱗状毛を密生し，ナツグミの果実は5～7月に熟す。またアキグミの果実は直径1cmほどの球形で表面に毛がある。

＜一言うんちく＞

クコは日本でも古くから健康長寿の食材と知られ，「後漁草」にも登場する久米仙人も愛用し186歳まで長生きしたとされます。また，文豪夏目漱石の名著「草枕」にも「家の南面に枸杞の生け垣を植えると、病人が出ない」の一節があるほど，長寿・厄除けとして身近な植物だったのです。

果実を乾燥させた「クコの実」

＜人との関わり合い＞

低木でトゲがあり萌芽力も強いので，厄除け・魔除けも兼ねて，生け垣に利用されることも多い。また，果実が「枸杞子（くこし）」，根皮が地骨皮（じこっぴ），葉は枸杞葉（くこよう）と，全草が生薬に使われるなど，古来から有用な植物として利用されてきた。枸杞子には強壮，疲労回復，頭痛，かすみ目などに，地骨皮には解熱，鎮咳，去痰作用，枸杞葉は動脈硬化や高血圧症に良いとされる。また，果実は杏仁豆腐の添え物などデザートや菓子に，若葉は天ぷらや炊き込みご飯にして食べられる。

＜俳句や短歌への登場＞

『季語：晩秋（枸杞の実）』

枸杞垣の似たるに迷ふ都人（与謝蕪村）
草枯るゝ賤の垣根や枸杞赤し（正岡子規）
枸杞の実を噛み東京を憎みをり（原田　喬）
枸杞の実のさびしさも夜を越えざりき（加藤秋邨）
枸杞にかも雨降る瞼覚めざるは（千代田葛彦）
枸杞の実の人知れずこそ灯しをり（富安風生）

タチツボスミレ …… 51
タネツケバナ …… 40
チカラシバ …… 96
チドメグサ …… 106
チャノキ …… 101
ツユクサ …… 7
ツリガネニンジン …… 69
ツルボ …… 84
ツルマメ …… 86
ツワブキ …… 60
ドクダミ …… 19

ナ行
ナガミヒナゲシ …… 113
ナズナ …… 27
ナンテン …… 103
ニリンソウ …… 61
ヌスビトハギ …… 111
ネジバナ …… 53
ノミノフスマ …… 14

ハ行
バイカモ …… 44
フユノハナワラビ …… 78
ハハコグサ …… 50
ハボタン …… 70
ヒガンバナ …… 76
ヒツジグサ …… 55
ヒナタイノコヅチ …… 24
メヒシバ …… 57
ヒメジソ …… 58
ヒルガオ …… 54
ブタナ …… 104
フデリンドウ …… 71
ヘクソカズラ …… 75
ヘビイチゴ …… 62

マ行
ミズハコベ …… 39
ミズマツバ …… 93
ミズワラビ …… 23
ミゾソバ …… 33
ムラサキツメクサ …… 64
メリケンカルカヤ …… 13

ヤ行
ヤエムグラ …… 63
ヤクシソウ …… 77
ヤナギタデ …… 85
ヤブカンゾウ …… 31
ヤブガラシ …… 82
ヤブラン …… 107
ユキノシタ …… 115
ヨモギ …… 110

ラ行
リュウノヒゲ …… 102

ワ行
ワレモコウ …… 25

（2022 年 6 月　メルマガ第 145 号時点）

【2022 年秋の一般公開で追加】

- アゼトウガラシ
- ギシギシ
- サザンカ
- ヌスビトハギ
- ナガミヒナゲシ
- ユキノシタ
- ヨモギ

索 引

ア行

アキノエノコログサ …… 47
アキノノゲシ …… 94
アゼトウガラシ …… 109
アメリカアゼナ …… 83
アメリカセンダングサ …… 37
アメリカフウロ …… 52
イチョウウキゴケ …… 90
イヌガラシ …… 48
イヌタデ …… 11
イヌタヌキモ …… 66
ウツギ …… 91
ウマノアシガタ …… 18
ウラジロ …… 88
ウラジロチチコグサ …… 97
オオイヌノフグリ …… 15
オオオナモミ …… 49
オオジシバリ …… 80
オモダカ …… 10
オランダミミナグサ …… 28

カ行

カズノコグサ …… 38
カタバミ …… 34
カナムグラ …… 21
ガマ …… 12
カラムシ …… 32
カワラケツメイ …… 67
カントウヨメナ …… 59
キキョウ …… 99
ギシギシ …… 114
キショウブ …… 81
クコ …… 100
クサノオウ …… 42
クサネム …… 65
クズ …… 46
クログワイ …… 95
ゲンゲ …… 89
ゲンノショウコ …… 45
コウホネ …… 8
コセンダングサ …… 87
コナギ …… 98
コナスビ …… 72
コニシキソウ …… 92
コハコベ …… 30
コマツヨイグサ …… 105
コメツブツメクサ …… 73
コモチマンネングサ …… 43

サ行

ザクロソウ …… 56
サザンカ …… 112
サンショウモ …… 74
ジュンサイ …… 108
シロザ …… 35
シロバナサクラタデ …… 22
スイバ …… 29
スギナ …… 17
ススキ …… 36
スベリヒユ …… 9
セイタカアワダチソウ …… 68
セイヨウアブラナ …… 41
セリ …… 20

タ行

タガラシ …… 16
タウコギ …… 79
タコノアシ …… 26

分布：本州，四国，九州

チャノキ （ツバキ科）

学名：*Camellia sinensis*（カメリア シネンシス）

茶の木　　別名：チャ，茶樹

主な生育場所

茶畑での栽培のほか，庭木や生垣などとして植栽される。また，畑と畑の境界を示す畦畔木として植えられることもある。野生では，伊豆半島や九州地方の照葉樹林帯の低木～中層木として育つ。

名前の由来：中国大陸から茶の木がもたらされたときに，漢名の「茶」を音読みし，「チャ」とした。

特 徴

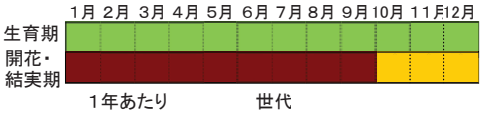
野生では10m程度の高さにも成長するが，栽培下では刈り込まれるためよく分枝し高さ2mほどに株立ちする。樹皮は灰白色。葉は表面に光沢があり，縁が波状の細かい鋸歯となり互生する。晩秋に枝先の葉腋に直径2～3cmで花弁が5～7枚の白い花を下向きにつける。果実は直径1.5～2cmのほぼ球形で翌年9月ごろに成熟する。

＜農業との関係＞

現在，栽培されるチャノキは，1191年に禅僧の栄西が中国から持ち帰った種子の子孫とされる。最も栽培面積が広いのは静岡県で，次いで鹿児島県，三重県と続く。静岡県牧之原台地などでは，茶園周辺に採草地を設け，刈り取った草を茶樹の株元や畝間に敷いて良質茶を生産する伝統的農法が行われており，2013年にFAO（世界食糧農業機関）から世界農業遺産として認定された。

多数の長い雄しべが目立つ白い花が下向きに咲く

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



＜類似種＞ 同じツバキ科のヤブツバキの葉には鋸歯がないかまたは目立たない。サザンカの花はツバキやチャノキと異なり，花ごと落ちずに花弁がバラバラに散る。低木で葉の形や大きさがよく似るヒサカキの花は直径5mmほどと小さく春に咲く。

果実は熟すと3裂，各室に1～2個の種子が入る。

＜一言うんちく＞

中国の古書「神農本草」には，古代中国で医療と農業を広めたとされる伝説的な大帝神農が，様々な草木を自ら食しその薬効を調べた際に何度も毒にあたり，茶の木の若葉で解毒したと紹介されるほど，古くから薬効あらたかな薬草として知られていたようです。

＜人との関わり合い＞

飲用の茶葉は新葉を摘み取ったもので，乾燥させ緑茶や抹茶とする。茶葉を発酵させるとウーロン茶や紅茶となる。緑茶などの茶葉は，飲用後の茶殻も含め食べることもできる。主な薬効成分はアルカロイド，フラボノイド，タンニンなどで，茶葉には利尿，発汗，下痢止めなどの作用があるとされる。民間療法では，口内炎，咽喉炎，風邪予防のうがい薬として利用されたり，細菌性の下痢に濃く煎じた渋茶が効くとされる。また種子は去痰や咳止めに効果があるといわれている。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：初冬（茶の花）】

日によって茶の花をかぐ命かな （飯田蛇笏）
いつしか明けてゐる茶の花 （種田山頭火）
茶が咲いていちばん遠い山が見え （大峯あきら）
茶の花の映りて水の澄む日かな （飯田龍太）
茶の花に今夕空の青さかな （久保田万太郎）
けふあす何事もないやうに白く咲いた茶の花 （中川一碧楼）

分布：全国

ジャノヒゲ　（ キジカクシ 科）

学名：*Ophiopogon japonicus*（オフィオポゴン ヤポニクス）

蛇の髭　　別名：リュウノヒゲ（竜の髭），ネコダマ（猫玉），麦門冬（ばくもんとう），はずみ玉

主な生育場所

林床や林縁，樹木の根元，路傍，草地などに生育する。落葉樹林の落ち葉がよく積もる木陰などに多い。やや日陰を好むが，日当たりのよい場所でもみられる。公園や庭園に植えられることも多い。

特 徴

短い走出枝を伸ばし群生して増える10～15cmほどの多年生。幅2～3mm，長さ10～20cmほどの細長い葉を多数根生し株状となる。7～8月にかけて高さ7～ 18 cmほどの花茎を出し，ややまばらな花序をつける。6花弁で径約7mmの花は白色あるいは淡紫色。花後にできる径7mmの球形の種子は冬期に瑠璃色に熟してよく目立つ。

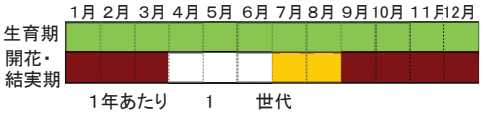
名前の由来：　能面で老人を表す「尉（じょう）」のお面にはあごひげがあり，このあごひげに細い葉を見立てて「尉のひげ」（じょうのひげ）。これがジャノヒゲに転化した。

＜農業との関係＞

畑や水田内に生えることはなく，邪魔になることはない。一方，ジャノヒゲや園芸種で草丈が低い「タマリュウ」は，乾燥や冠水にも強く扱いやすいため，畦畔法面の管理を省力化するカバープランツとして利用される。例えば，タマリュウを10cm間隔で植え付けると約2年間で全面を被覆し雑草抑制に有効である（https://www.naro.affrc.go.jp/org/warc/research_results/h19/01_sakumotu/p21/index.html）。

樹木の根元に群生するジャノヒゲ

＜生活史＞　　関東 地方の例（目安）



＜類似種＞　ヤブランの草丈は20～40cmほどとなり，葉も広く，花穂が長区伸びる。また果実はジャノヒゲの鮮やかな瑠璃色に対し黒色。日当たりのよい場所にみられるツルボの花期はジャノヒゲよりもやや遅く，小さな花を穂状に密につける。

＜一言うんちく＞

これからの季節，ジャノヒゲの光沢のある瑠璃色の種子が良く目立つようになります。この種子，かなり弾力性に富み，アスファルトなどの地面に投げつけるとまるでスーパーボールのように強く弾みます。園芸種のタマリュウでも同じような実がなりますので，探して試してみてください。

熟すと鮮やかな瑠璃色となる種子

＜人との関わり合い＞

肥大した根を夏期に掘り上げて水洗い後，乾燥させたものは麦門冬（ばくもんどう）と呼ばれ，昔から滋養強壮，咳止め，去痰，利尿などに利用されてきた。また，四国などでは湯がいた茎は油揚げなどと一緒に煮こんで食べる。タマリュウも含め作庭やグランドカバーにもよく利用され，植え込みの前景などに使われる。冠水にも強いので，最近では観賞用の水草と扱われることもある。熟すと光沢のある瑠璃色の種子は，冬枯れの野で良く目立つので，冬の季語として多くの俳句等にも詠われてきた。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：蛇の髭，麦門冬＝夏，竜の玉＝冬】
一日のほんの日当り竜の髭　（角　光雄）　行わたる掃除や藪に麦門冬（清民）
竜の玉深く蔵すといふことを　（高浜虚子）　竜の玉などもてあそぶ日もありぬ（山口青邨
ひたぶるに念佛いたせ龍の玉　（辻桃子）　地球またかく青からむ龍の玉（鷹羽狩行）

分布：全国

ユキノシタ　（ユキノシタ 科）

学名：*Saxifraga stolonifera*（サキシフラガ ストロニフェラ）

雪の下　　別名：ゴジソウ，ミミダレグサ，イドクサ，鴨足草，虎耳草

主な生育場所

山裾や谷川沿いの湿った場所や湿った石垣や岩場に生える。木陰やあまり日の当たらない環境を好む。庭先や生け垣の下に栽培されることも多い。日陰に強いことから坪庭で使われることも多い。

特 徴

高さ20～50cmほどになる多年草。根元から走出枝を伸ばし，小苗をつける。縁が浅く切れ込んでいる葉はほぼ円形，表面に長めの毛が密生し，表面は葉脈に沿って白色の斑が入る。初夏に花茎を伸ばし円錐花序に左右相称形の5弁の白い花を多数つける。花は上部の小型の卵形の3弁と大きくて細長い下部の2枚からなる。

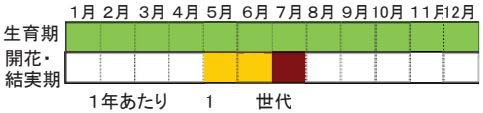
名前の由来：常緑の葉に出る白斑を雪に見立て，その下に緑の葉があることから，また，積雪期でも枯れずに緑の葉が残ることから，白い花弁を降る雪に喩えた，など諸説ある。

＜農業との関係＞

半日陰の環境を好むので農地に侵入することはほとんどないが，日の当たりにくい湿っぽい畔や手入れの悪い樹園下などに見られることがある。

小さな花弁3枚と、不同で長い花弁2枚からなる花

＜生活史＞　　関東 地方の例（目安）



＜類似種＞よく似た花をつけ，山地の湿気のある岩場などに生えるハルユキノシタやジンジソウ，ダイモンジソウの葉には白斑が入らない。人里に生えるカキドオシも葉が似て地面を這うが，茎の断面は四角く紅紫色の花を葉腋につける。

＜一言うんちく＞

ユキノシタの若い葉の裏はもともと白色ですが，やがて紫色から暗紅色に変わっていきます。これは葉を透過する太陽光を暗い色で反射させ，もう一度光合成に用いるためとされ，暗い場所でも生育できるユキノシタの「生活の知恵」とも言える工夫なのです。

葉の裏面は白または暗紫色となる

＜人との関わり合い＞

被陰にも強く，花も葉も特徴的なことから，古くから鑑賞用に栽植されてきた。また，食用にもなり，清潔な柔らかい葉を摘み，丁寧に水洗い後，葉の下面だけコロモをつけて天ぷらにすると葉の表面の模様が美しく残り，かつ美味しく食べられる。また，さっと茹でて水に晒し，ゴマ和えや辛子和えで味わう。葉は民間薬としても利用され，開花期に採取した葉を日干しし，火であぶって軟らかくしたものをやけどや腫れ物，しもやけに用いられる。煎じ液は下痢や胃もたれなどにも効くとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：夏】※鴨足草，虎耳草　いずれも　ゆきのした　と読み，多数，詠まれてきた。
卯の花の散り残りけるは鴨足草（ゆきのした）（尾崎放哉）　鴨足草雨に濁らぬ泉かな　（飯田蛇笏）
花散るやひそかにそだつ雪の下（中村汀女）　虎耳草葵の紋を葉の紋に（山口青邨）
日さかりの花や涼しき雪の下（呑舟）　夕焼は映らず白きゆきのした（渡邊水巴）

分布：全国

ギシギシ　（タデ　科）

学名：*Rumex japonicus*（ルメックス　ヤポニクス）

羊蹄　別名：牛草，牛の葉大王，陸蓴菜，渋クサ，シノネ，イヌスイバ，ウマズイコ

主な生育場所

畑や樹園地，畦畔，休耕地，荒れ地，路傍，野原，河原などに普通に生育する。やや湿った環境を好む。耕起など土壌の攪乱が少ない場所に多く，収穫後，翌春まで耕さない水田にも見られる。

特　徴

直立する高さ60～100cmほどの多年草。黄色で太い直根が地中深く伸びる。茎は太く中空で縦に筋が多い。根生葉は長い柄を持ち長楕円形で10～25cm，基部は心形か丸い。上部の葉は小型で柄がない。花序は円錐状で多数の小花が茎に輪生。果実には翼状の3枚の花被片が残り，縁に粗い鋸歯がある。中肋は瘤状に膨れる。

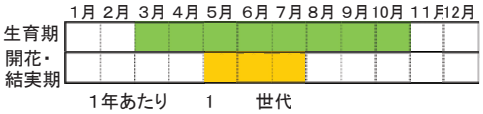
名前の由来：茎や葉穂をすり合わせるとギシギシと音が鳴る，たくさんの果実をつけた穂を振るとギシギシと鳴るから，など諸説あるがはっきりとはしない。

＜農業との関係＞

ギシギシの根は太く地下深く伸び，種子生産数も多いため，繁殖力が非常に強く，畑や果樹園に定着すると害草化する。刈り取りに強く，何度でも再生してくるため，畦に生えるとなかなか除去しにくい。農地内ではトラクターなどでていねいな耕起を短期間に複数回行うことで植物体が消耗し，低密度まで抑制できる。頻繁に耕起できない畦畔などでは，除草剤を用いた防除が有効となる。

葉は長楕円形，柄は長く基部は丸みを帯びる。

＜生活史＞　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞スイバ（2013年3月号で紹介）は葉の基部が矢じり状にとがり，茎は赤みを帯びる。外来種のエゾノギシギシは葉の中脈が赤みを帯びやすく，果実花被片の縁が棘状となる。同じく外来種のナガバギシギシの果実花被片の縁は全縁。

果実は中央部が瘤状に膨らみ，花被片の縁には粗い鋸歯がある。

＜一言うんちく＞

ギシギシは全国各地でみられる在来の雑草ですが，最近では海外起源ののナガバギシギシやエゾノギシギシ，アレチギシギシなど外来種が席巻し，ギシギシそのものを見かけることが少なくなりました。外来種はギシギシとよく似ていますが，果実の花被片の縁を見ると見分けやすいです。

＜人との関わり合い＞

東北地方では，若芽を地際から摘み取り，袋状のさやを取り除き軽く茹で水に晒し，お浸しやマヨネーズ和え，汁の実などに利用する。透明なぬめりと酸味を楽しめることから，「オカジュンサイ（陸蓴菜）」と呼ばれる。乾燥後，茹で戻しても食べられる。地上部が枯れた後に掘り上げた根を天日干ししたものは，生薬「羊蹄」で，アントラキノン誘導体などを含み，便秘薬となる。また，煎じた汁はいんきん，たむし，水虫などの皮膚病に効くとされる。染料にも用いられ，鉄媒染で鼠色に染められる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春（ぎしぎし），夏（羊蹄の花】
羊蹄に石摺り上る湖舟かな（杉田久女）　羊蹄花（ぎしぎし）や仮橋長き干拓地　（山田みづえ）
羊蹄は世に多がほの枯野かな（野澤凡兆）　ぬきん出てぎしぎし高し小田の畦　（高瀬夢生）
音たてて流るる水は春の水ぎしぎしの紅の芽を浸しゆく（土屋文明）

分布：本州・四国・九州

ナンテン　（メギ　科）

学名：*Nandina domestica*（ナンディナ　ドメスティカ）

別名：南天竹（ナンテンチク），南天燭（ナンテンショク），ナルテン，ナツテン

主な生育場所

公園や庭木などに鑑賞用として植栽される。関東以西の暖地では山地の渓流沿いなどに自性する。半日陰を好み，強い西日が当たるような場所を嫌う。また，水はけの良い土地を好む。

特　徴

中国原産の常緑の低木で樹高は1～3mほど。株立ちし，分枝せずにまっすぐ伸びる。直径2～3cmほどの幹の先端に羽状複葉を互生する。初夏に円すい状に花序を伸ばし，白い六弁花を多数つける。径6～7mmほどの丸い果実は晩秋から初冬にかけて鮮やかな朱色に熟す。果皮は薄く，中に1～2個の白い種が入る。

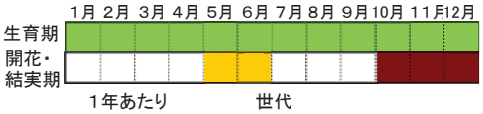
名前の由来：冬に目立つ赤い果実に野鳥が集まることを食堂の灯火（中国名で南天燭（ナンテンチュー））に見立てた。また葉が竹に似ることから南天竹とも呼ばれ，これらを音読みしナンテン。

＜農業との関係＞

ナンテンの実が真っ赤に熟すのは二十四節季の大雪（12月7日ごろ）のころで，雪国では収穫した野菜を保存するために雪の中に埋める作業を行う目安となる。また，石川県奥能登地方では，年の暮れのこの頃に，ユネスコ無形文化遺産にも指定された，田の神様へおもてなしを捧げる祭事「あえのこと」がおこなわれる。ナンテンはその年の収穫への感謝を象徴する植物の一つである。

食堂の灯りに見立てられた密集する赤い果実

＜生活史＞　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞ナンテンと同様に初冬に赤い実が成り，庭先によく見かける小低木にセンリョウ（千両）やマンリョウ（万両）があるが，センリョウもマンリョウも複葉とならず葉の縁は波打つか鋸歯がある。またトキワサンザシ（ピラカンサス）の枝には棘がある。

小葉は革質でやや光沢がある

＜一言うんちく＞

ナンテンは「難を転ずる」に通ずる縁起の良い樹木とされますが，御祝い膳の赤飯や魚料理にナンテンの小枝が添えられるのは，縁起を担ぐだけでなく，葉に含まれる「ナンジニン」が酸や水分に触れることにより防腐作用がある「チアン水素」を発生させ腐りにくくする効果もあるのです。

＜人との関わり合い＞

縁起木や厄災除けとして，玄関前や鬼門や裏鬼門に植えられてきた。また，さまざまな園芸品種も作り出され，白い実のシロナンテン，葉が黄色から赤に紅葉するオタフク南天，葉が糸状となる錦糸（キンシ）南天などがある。果実に含まれるドメスチンは運動神経の末梢に対しマヒ作用があり，ぜんそくなどの咳止めに効果がある。ハチ刺されには，よく揉んだ葉の汁をつけると痛み止めになる。ナンテンの葉や果実を刻みお茶にすると咳止めだけでなく，疲労回復や強壮などにも効果があるとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：冬（南天の実，実南天），初夏（南天の花）】
日当りや南天の実のかん袋　（小林一茶）
とやかくの家相を払ふ実南天　（能村登四郎）
南天の花の白さのめでたけれ（高野素十）
日当りに南天の実の笑初　（高澤良一）
風なくば好き日和なり実南天　（小野房子）
しぐれたるあとの日が射し実南天　（鷲谷七菜子）
騏麟の間南天の花を見て坐る（山口青邨）

分布：全国

ブタナ　（ キク科 ）

学名：*Hypochoeris radicata*（ヒポコエリス ラディカータ）

豚菜　別名：タンポポモドキ

主な生育場所

道端、野原、空き地、庭先、水田の畔、法面草地、畑、芝地、果樹園、牧草地など明るく乾いた環境によく見られる。草刈りがよく行われる場所に多く、やぶのような草刈りの少ない場所には見られない。

特 徴

ヨーロッパ原産の多年草。葉は根生し、タンポポの葉のように分裂する。両面に黄褐色の硬い毛が密生する。4月ごろから花茎を高さ50cm程度まで伸ばし、上部で数本に枝分かれした先に径3～4cmほどの舌状花のみからなる頭花をつける。花後はタンポポのように冠毛をつけたそう果となり、表面には細かい突起が密生する。

花茎は枝分かれし2～3個の頭花をつける

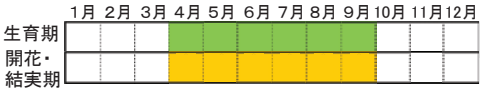
名前の由来：本種は原産地のフランスで「salade de pore（豚のサラダ）」で呼ばれており、それを直訳したもの。別名の「タンポポモドキ」とは、外見がタンポポによく似ていることから。

＜農業との関係＞

タンポポと同様に直根を地面深く伸ばすが、耕起には弱いため、畑や水田で問題となることは少ない。他の植物よりも刈り取り圧に強いため、果樹園や芝地では群落化してしまうことがあり、特に芝生を生産する畑ではブタナの群生によって芝生が刈れてしまうため、強害草として扱われる。

切れ込みが浅く硬い毛が密生するロゼット葉

＜生活史＞　関東 地方の例(目安)



1年あたり　1　世代

＜類似種＞タンポポの仲間は、花茎が枝分かれせず茎頭に頭花を一つだけつけ、葉にはほとんど毛が生えない。同じくヨーロッパ原産のヒメブタナは、全体的に小型で毛も少ない。

タンポポに良く似た頭花

＜一言うんちく＞

セイヨウタンポポの増殖力も旺盛ですが、ブタナも環境に対する適応性が高く、都市部から農村部、海浜から高山帯まで広く分布を拡げています。踏みつけや刈取りにも耐性があり、類似種のヒメブタナとの雑種も報告されており、すでに全国各地で初夏の風景の一部になりつつあります。

＜人との関わり合い＞

植物体全体が食用となり、ヨーロッパなどででではボイルされた葉を野菜のように食べているようだ。タンポポ同様に苦みはあるものの、若葉は苦みが少なく、サラダ、茹で野菜、揚げものなどにすると美味しい。成長が進んだ茎葉部は硬く、あまり食されない。根もタンポポと同じく、コーヒーの代替品として炒ってハーブティーとして利用される。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：不明】

昭和初期に帰化してからまだ間もないため、俳句や短歌などへの登場は見ない。

分布：全国

ナガミヒナゲシ　（ ケシ 科）

学名：*Papaver dubium*（パパウェル ヅビウム）

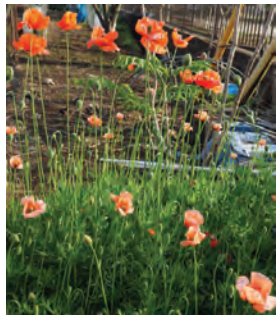
長実雛罌粟　別名：ひなげし，ポピー，虞美人草，コクリコ

主な生育場所

路傍，荒れ地，空き地，河川敷，畦畔，畑地，草地，樹園地など，日当たりがよく乾いた場所なら里地の至る所に見られる。貧栄養の環境でも生育するが，肥沃な土地ほど群生化しやすい。

特 徴

越年草（一年草）。地中海原産の帰化植物。高さ20～60cmで全体有毛。根生葉は長さ20cmに達し，茎につく葉も含め1～2回羽状に深く裂ける。朱赤色または淡紅色の4弁からなる径3～6cmの花を茎の先端に単生する。花後に円筒形の子房が2cmほどに伸び果実となる。熟すと上面の蓋がめくれ1,000以上の小さな種子がこぼれる。



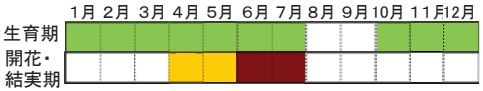
名前の由来：近縁で鑑賞用のヒナゲシ（ポピー）に良く似ているが，花後に丸い果実となるヒナゲシに対し，細長い円筒状の果実をつけることから長実ヒナゲシ。

＜農業との関係＞

種子を多数つけ，繁殖力が旺盛なことから，畦畔だけでなく，畑内や樹園地にも侵入し，害草化している。花がきれいなため，花後を待って草刈りなど行ってもすでに結実種子がこぼれていることも多く，まん延を助長している面もある。また他の植物の生育を阻害するアレロパシー成分を含むことも報告されており，麦畑などでは駆除が難しい難防除な雑草となる場合もある。

花弁中心部の子房が花後に円筒状の果実となる

＜生活史＞　関東 地方の例(目安)



1年あたり　1　世代

＜類似種＞園芸用のヒナゲシは良く似ているが果実の形が球形～長球形で円筒状にならない。栽培が禁止されている「ケシ」は全草が無毛。同様に栽培が禁止されるアツミゲシには剛毛が生えるが，葉は深く切れ込むだけで，果実は長球形となる。

有毛で羽状に細かく切れ込む葉
開花前のつぼみは下を向く

＜一言うんちく＞

葉や茎を折ると乳白色あるいは黄色の乳液が出ますが，アルカロイドが含まれており素手で触るとかぶれることがあり，除草する際には要注意です。このアルカロイドには麻酔作用があり古代ギリシャでは麻酔薬に使われたそうです。ただし，ケシのように阿片の成分は含まれていません。

＜人との関わり合い＞

日本には鑑賞用ではなく輸入穀物に混じって渡来したとされる。園芸種のヒナゲシに似ることから駆除せずに花を楽しむことも多く，種子生産を助長している一面もある。また，大量に生産される小さな種子は風による飛散だけでなく車のタイヤや靴裏などに付着して分散していることも考えられ，人為によってまん延化を招いているといえよう。有毒なので食用にはならないが，ヨーロッパでは古くから，睡眠導入，鎮静，止痛成分を含む薬草として利用してきた。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春】 ※ヒナゲシ全般

筍哉虞美人草の蕾哉 （正岡子規） 花芥子の雨に堪へつつゆがみたる （高浜 年尾）

ああ皐月 仏蘭西の野は 火の色す 君もコクリコ われも雛罌粟 （与謝野 晶子）

ひなげしのちる日のほどを歌の選（三好達治） ポピー野に咲けば加州の春といふ（山口 青邨）

分布：山口県，四国，九州，沖縄

サザンカ　（　ツバキ　科）

学名：*Camellia sasanqua*（カメリア　ササンクァ）

山茶花　　別名：イワハナビ（岩花火），ヒメツバキ，コツバキ，コカタシ，茶梅

主な生育場所

自生地では山地の照葉樹林に生育。陰地でも日当たりのよい所にも見られる。全国の公園や庭先などに植栽されており，水はけが良く肥沃な土壌でよく育つ。低温には弱く寒い地方では防寒が必要。

名前の由来：本来，ツバキを指す中国名の山茶花がツバキには「椿」の漢字があるためサザンカにあてられ，いつか「茶山花」と誤記され，その読み方として「さざんか」と呼ばれるようになった。

特　徴

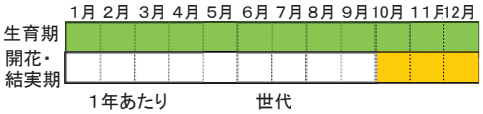
2～6mほどの高さとなる常緑の広葉樹。樹皮は平滑で灰褐色。枝は淡褐色で無毛。革質で鈍い光沢のある葉は互生し，葉身の長さ3～7cm，幅2～3cm，縁に鈍い鋸歯がある。晩秋から冬にかけて枝先に直径5～8cmほどの白い花をつける。果実は球形で直径1.5～2cmほど。中には褐色で1～1.5cmほどの種子が2,3個入る。

＜農業との関係＞

同じツバキのチャノキと同様に，隣接する畑の境界に畦畔木として植栽されることもある。また，材は小細工物に適しているため，農具の柄などにも利用されてきた。茶花や生け花の材料としても使われてきたため，農家の庭先や生け垣などに植栽されることも多い。

八重咲きの濃いピンク色の花を付ける品種

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞　よく似たツバキとの見分け方は，サザンカの花は花びらが一枚ずつ散るのに対し，ツバキは花ごと落ちる。また，花のない時期では，サザンカの葉裏の脈に毛が目立ち鋸歯はやや深いが，ツバキの葉裏に毛はなく鋸歯は浅く目立たない。

＜一言うんちく＞

冬に咲く椿の仲間にはサザンカ，ツバキのほかにカンツバキ（寒椿）があります。カンツバキはサザンカとツバキの交雑種とされますが，花はサザンカのように花びらが散っていくため，サザンカの仲間とされます。寒さにも強く，サザンカよりも遅く厳冬期（1～2月）に花をつけます。

公園に植栽されたサザンカの大木

＜人との関わり合い＞

南九州地方ではサザンカの新芽を摘んでお茶としたり，また新芽には芳香があることから香袋に利用することがある。種子からはツバキ油と同様にサザンカ油も取れ，毛髪香油や軟膏基剤などに利用される。花の少ない時期に咲くことから「冬の花」として好まれ，江戸時代中期からツバキと掛け合わせ多くの品種がつくられ各地に植栽された。そのため誰でも馴染みのある花木であり，市町の木となったり，童謡の「たき火」や「さざんかの宿」，「サザンカ」など演歌やポップスでも題材となることが多い。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：冬】 山茶花を雀のこぼす日和かな （正岡子規）　小鳥来る山茶花一つ花咲かせ（山口青邨）
佳き石のあれば山茶花散りおほふ（水原秋櫻子）　山茶花の咲くより散りてあたらしき （日野草城）
雲による御仏といふ床わきにいつきまつらひ山茶花の花（伊藤左千夫） 山茶花を椿ときくも草枕（成田蒼虬）
さざんか、さざんか咲いた道。たき火だ、たき火だ。落ち葉焚き。あたろうか、あたろうよ。巽聖歌　童謡「たき火」より

分布：北海道を除く全国

コマツヨイグサ　（　アカバナ　科）

学名：*Oenothera laciniata*（オエノテラ　ラキニアータ）

小待宵草　　別名：キレハマツヨイグサ（切れ葉待宵草），ツキミソウ（月見草）

主な生育場所

路傍や荒地，庭先，畦畔，土手，河原，海岸などの明るく乾いた場所に生育する。砂地を好み，砂浜や砂丘によく見られるが，冠水する環境には生えない。畑地内や樹園下にも見られることがある。

名前の由来：マツヨイグサの花は夕方になると開き，翌朝に萎むので，宵（よい）を待って花が咲くということで待宵草。マツヨイグサの仲間のうちで本種は花が小さいので小待宵草。

特　徴

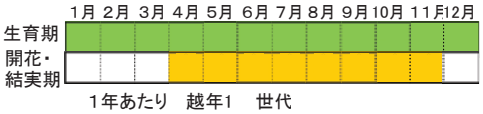
北米原産の外来種。生育条件によって越年草にも二～数年草にもなる。地面を這うことが多いが，斜上し草高50cmほどに達することもある。茎や葉に開出毛があり，葉は羽状に中深裂する。4月から11月にかけ，葉腋に径1～2.5cmほどの淡黄色の4弁花をつけ，しおれると黄赤色に変わる。円柱形の果実には短毛が生える。

＜農業との関係＞

刈払いで管理される乾いた休耕地などで群落化することがある。基盤整備などで造成直後や低位置での刈取頻度が高く裸地化している畦畔にもよく見かける。耕起に弱く，よく耕されている畑地内には定着しにくいが，アメリカでは不耕起栽培の普及による増加が報告されており，耕起が少ない畑や明るい果樹園下で増殖し雑草化することがある。

地面を這って拡がっている株

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞日本に帰化するマツヨイグサのうち，地を這い，葉に大きな切れ込みがあり花の直径が2～2.5cmであるのはコマツヨイグサだけ。他のマツヨイグサやメマツヨイグサ，オオマツヨイグサは直立し，葉は切れこまず花の直径は3～5cmと大きい。

＜一言うんちく＞

夜に咲くマツヨイグサの花は，主に夜行性の蛾によって受粉されています。そのため，蛾の長い口に対応し蜜腺は花の下部に伸びる筒状の部分の奥にあり，花粉はクモの糸のように繋がり，鱗粉のためハチなどに比べて付着しにくい蛾の羽にうまく絡まりやすいようになっています。

四弁化は夕方開花し，翌朝に萎む

＜人との関わり合い＞

美人画で有名な竹久夢二が「待てど暮らせど来ぬ人を 宵待ち草のやるせなさ 今宵は月も出ぬそうな」と詠った「宵待ち草」はマツヨイグサのこととされる。夜咲く黄色い花で夜目にもよく目立つことから観賞目的で導入されたが逃げ出し，各地で雑草化している。とくに鳥取砂丘など海浜で繁茂し，在来の植生に大きく影響を与えるため，生態系被害防止外来種に指定されている。花は夕方に摘み，天ぷらなどで食べられる。また，マツヨイグサの仲間には咳止めや健胃に効果があるとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：夏】
かの母子の子は寝つらんか月見草（中村草田男） とびかかる焜炉の火の粉月見草（富安風生）
破船埋もれ待宵草を点す闇 （佐藤鬼房） 花引きて一たび嗅げばおとろへぬ少女ごころの月見草かな（与謝野晶子）
霜あれの庭にしじまり青々と待宵草のもと株ふたつ （鹿児島寿蔵）

分布：北海道を除く全国

チドメグサ　（　ウコギ　科）

学名：*Hydrocotyle sibthorpioides*（ヒドロコティレ　シブトルピオイデス）

血止草　　別名：ゼニクサ，チョウチングサ，ウズラグサ，カガミグサ

主な生育場所

水田の畦畔、路傍、庭先、芝地、野原など、やや湿った環境下で見られる。刈取りや踏みつけにも強く、開けた明るい環境や被陰された場所でも見かけるが、植物に完全に覆われる環境は好まない。

特　徴

茎はよく分枝して地をはう多年生。節からひげ根をだして繁殖する。表面に光沢のある葉は互生し、直径1～1.5cmの円形で掌状に浅く裂ける。基部は心形。葉は浅く裂け、さらに3～5個の歯牙がある。葉腋から長さ0.5～1.2cmの短い花柄を伸ばし、先に帯緑色の花を10数個つける。花序は葉より短い。果実は直径1mmの扁球形。

浅い切れ込みの光沢のある葉が特徴

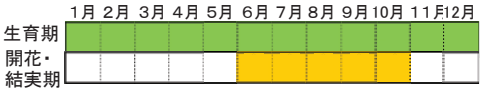
名前の由来：水田や沼などでヒルに吸われたときに、葉を揉んで患部に貼り付けると血が止まることから。別名の銭草（ゼニクサ）は丸い葉の形がお金に似ていることから。

＜農業との関係＞

やや日陰の湿った果樹園では一面に覆ってしまい害草となることがある。また、芝地に生えると刈り払いで防除できずに、芝生を覆ってしまうと芝生の生育を悪化させる。刈取りに強く、チドメグサで覆われてしまうと他の草が生えにくくなることから、水田の畦畔では意図的にチドメグサを優占させるように誘導する場合もある。なお、湛水や耕耘には弱いので田内に生えることはあまりない。

空き地に見られる群落

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



1年あたり　1　世代

＜類似種＞

葉の切れ込みが深く、基部はV字形に開くのがノチドメ。オオチドメの葉は直径1.5～3cmと大きく、花序は葉の位置よりも高く伸びる。また、ヒメチドメは葉の直径0.5～1cmと小さく深く切れ込み、基部はV字形に開き、花も2～4個と少ない。

葉は深く切れ込み、基部がV字に大きく開いたヒメチドメ

＜一言うんちく＞

チドメグサはかつてセリ科に属していましたが、最近の分類ではウコギ科に編入されました。ウドやタラノキ、コシアブラなど野菜や山菜として利用されるものが多く含まれるウコギ科ですが、今後さらにチドメグサの分類的位置づけが変わる可能性があります。

＜人との関わり合い＞

チドメグサの仲間には収斂作用による止血成分が含まれ、止血の民間薬として古くから利用されてきた。一般的な方法は、葉をよく洗い、揉む、磨り潰すなどして外傷部（擦過傷や切創などの出血性外傷）に塗布する。葉を洗ったあと乾燥すれば、生薬のように服薬して用いることができる。食用に関しては記録がない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：秋】 オトギリソウ科のオトギリソウも別名、血止草と呼ばれ、オトギリソウを指している可能性がある。
明方の滝のよき音血止草　（飯田龍太）
首塚の影のうごかぬ血止草（渡辺　昭）
抜くたびに殖えてゐるなり血止草　（富沢みどり）

分布：全国

ヌスビトハギ　（　マメ　科）

学名：*Desmodium podocarpum* subsp. *oxyphyllum*（デスモディウム　ポドカルピウム　オキシフィルム）

盗人萩　　別名：ひっつき草，山馬蝗（さんばこう）

主な生育場所

平地から山地までの林縁や草地，路傍などに生育する。谷津田など，林縁が迫っている田畑の畦畔や，樹園地でも見られることがある。単生することは少なく林縁などにまとまって生えることが多い。

特　徴

高さ60～120cmほどの直立する多年生。3枚の小葉からなる葉は長い柄を持ち，互生する。夏から秋にかけて枝先や葉脇から伸ばした花枝に3-4mmで薄紅色の蝶形花をまばらにつける。果実は節でばらばらになる節果で，種子1つを含む半月形で扁平な節果が2つ連なる。果実の表面には細かな毛が密生し，衣服などによくくっつく。

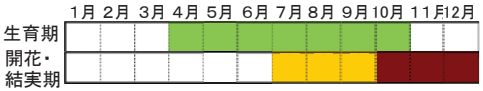
名前の由来：半月形の節果が2つ連なる果実の形を泥棒が忍び足で歩く足跡に見立てたとの説や，果実が気づかないうちに衣服などにひっつく様子から「盗人」を想起したなどの説がある。

＜農業との関係＞

ヌスビトハギは「ひっつき虫」である果実の特徴から種子で拡がりやすいと思われがちだが，実際の群落を見ていると地下茎を形成して定着していることが多い。頻繁に耕起されたり草刈りが行われる畑内や畦畔などでは地下茎を充実させられずに，種子で侵入しても長期間にわたって定着することは少ない。類似種アレチヌスビトハギのほうがより繁殖力が強く樹園地などで雑草化しやすい。

への字形に連なる半月形の節果2つからなる果実

＜生活史＞　地方の例（目安）



1年あたり　1　世代

＜類似種＞

関東地方以西には，ヌスビトハギよりも大型で花も大きく，5～6個の節果が連なる外来種アレチヌスビトハギが見られる。山地の林内には，小葉が幅広く倒卵形のマルバヌスビトハギ（在来種）が分布する。

外来種アレチヌスビトハギの花

＜一言うんちく＞

ヌスビトハギの果実の表面には短い硬い毛が密生していますが，拡大して見てみると，毛の先端がアルファベットのJを逆さにしたように鈎上に曲がっています。これは面ファスナー（マジックテープ）のフック面と同じ構造で，扁平な形状もあり毛織物の衣服に付くと剥がれにくいのです。

＜人との関わり合い＞

節果に入っている種子は豆果として食べられるようだが，小さく採集も面倒のため，利用されることはほとんどない。一方，生薬としては，山馬蝗（サンバコウ）として，中国では全草を咳止めや切り傷用に利用されるようだ。
また，名前に萩とつくが，花は地味で小さく観賞されてこなかったが，「ひっつき虫」としての果実はその特徴的な形状からも詩や俳句などの材料として関心を持たれ，下記に紹介するように宮沢賢治も作中で取り上げている。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：秋】 曲りゐる盗人萩の花の先　（京極杞陽）
てぶくろに盗人萩の実を付け来（辻　桃子）　躓きて盗人萩の名を覚ゆ　（松山足羽）
「（略）　はやしのくらいとこをあるいてゐると　三日月がたのくちびるのあとで　肱やずぼんがいつぱいになる」
宮沢賢治「春と修羅」の中から「一本木野」　※ヌスビトハギの果実を「三日月がたのくちびる」と表現。

分布：本州・四国・九州

ヨモギ　（キク　科）

学名：*Artemisia indica* var. *maximowiczii*（アルテミシア インディカ　マクシモヴィッチ）

蓬　別名：モチグサ（餅草），モグサ，ヤイトグサ，サシモグサ，ヤイクサ（焼い草）

主な生育場所

野原，路傍，田畑の畦畔，畑，樹園下，川辺，法面，など至る所に見られる。日当たりの良いやや乾いた場所を好む。水辺にも生育し冠水にも耐えるが，常時水位が高いような場所には見られない。

特　徴

主に地下茎で繁殖する多年生。茎は直立し50-100cmほどとなり多くの分枝を出す。裏面に綿毛を密生する葉は羽状に中・深裂し縁に鋸歯を持つが変異に富み，茎上部の葉は小型で切れ込み・鋸歯ともに少ない。秋に枝先に径1.5mmほどの目立たない小型の頭花を多数，円錐状につける。種子に冠毛はないが小さく風散布される。

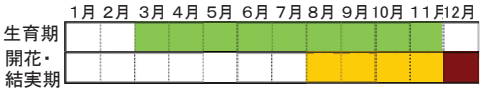
名前の由来：直立した古い茎は木質化し良く燃えるので「善燃木（よもぎ）」との説や地下茎を四方に這わすことから「四方木（よもぎ）」の説など諸説ある。また草餅の原料となることから餅草。

＜農業との関係＞

定着すると地下茎を旺盛に発達させるが，耕起や湛水に弱いため，水田内や耕起が繰り返される畑地ではあまり問題とならない。しかし，耕起を行わない果樹園下や草地などでは発生量が多く，作物と養分や水分を競合し，強害雑草となる。また刈取り管理はかえって地下部の増殖を促し，新たな萌芽も促進させてしまう。また雨の多い時期の耕起も萌芽可能な断片をばらまくことになる。

白い綿毛を密生する葉裏と花序

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



1年あたり　1　世代

＜類似種＞

ヨモギの葉は変異が多く，トリカブトなど切れ込みのある葉をつける毒草などと間違われることもあるが，ヨモギの葉の裏には綿状の毛が密生すること，葉をちぎると特有の香りがあることから見分けられる。

＜一言うんちく＞

近年，道路工事や災害復旧などで造成した法面の緑化にヨモギなどが使われていますが，そのほとんどは中国や韓国からの輸入種子の利用です。中国や韓国のヨモギも国内のものと同種とされていますが，その遺伝的タイプは異なり，国内系統との交雑や置き換わりが懸念されています。

生育期のヨモギ

＜人との関わり合い＞

昔から食用，お灸，薬草など多くの用途に利用されてきた身近な有用植物の一つである。若葉を摘んで餅に混ぜて搗くと草餅となり，特有の香りが楽しめる。また，天ぷらにしたり，塩茹でし，お浸し，ゴマ和え，クルミ和えなどにしても美味しい。乾燥させ葉の裏の毛だけ集めると艾（もぐさ）となる。また乾燥した葉は「蚊遣り」として蚊除けにも利用される。ショウブの葉とともに風呂にも入れられる。陰干しした葉は「艾葉（かいよう）」という生薬となり，止血などに効く。煎ずれば腹痛，喘息に良いとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：春】春雨や蓬をのばす草の道　（松尾　芭蕉）
風吹いて持つ手にあまる蓬かな　（水原　秋桜子）　　つみためて臼尻に撰る蓬かな（飯田　蛇笏）
しやうつかのばばが蓬を摘んでゐる（山口　青邨）　　学校へ行かぬ子達か蓬摘（正岡　子規）
ほととぎす来鳴く五月の菖蒲草蓬かづらき酒みづき遊び和ぐれど　（万葉集・大伴家持）

分布：全国

ヤブラン　（キジカクシ 科）

学名：*Liriope muscari*（リリオペ ムスカリ）

薮 蘭　別名：サマームスカリ，ノシメラン，ジャガヒゲ，テッポウダマ，ネコノメ，麦門冬

主な生育場所

林内の林床や薮（やぶ）などの木陰となるような場所。畦畔や樹園で見られることもある。庭先に植栽されることも多い。日陰を好むが，日がよく当たる場所でも生育する。貧栄養な環境や乾燥にも強い。

特　徴

多数の葉が根生し30-60cmほどの高さの大きな株となる多年生。線形の葉は濃緑色で厚く光沢があり，幅約7-12mm。夏から秋にかけて株間から多くの花茎を30-50cmほど伸ばし，穂状に径7mmほどの淡紫色の6弁花を多数つける。花終に径5mmほどの光沢のある球形の種子をつけ，最初緑色だが熟すと黒色となりよく目立つ。

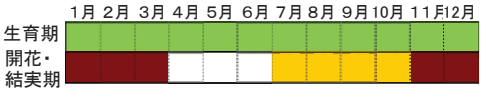
名前の由来：低木や笹などが密集したやぶでよく見られ，葉が蘭に似ていることから。また，葉も茎も火熨斗（ひのし：昔のアイロン）で熨（の）したように平たいことから熨斗目蘭（のしめらん）。

＜農業との関係＞

日陰となるような水田畦畔などに見られることがあるが，農地には入らず，また畦畔管理の邪魔とならない。一方，近年，ヤブランが他の雑草の発生を抑制する効果が高いことが報告され，畦畔などで被覆植物（カバープランツ）としての可能性が高まっている。

木陰では葉はまばらになり，花付きも悪くなる

＜生活史＞　関東 地方の例（目安）



1年あたり　　世代

＜類似種＞

ジャノヒゲ（2020年11月号で紹介）の葉は幅2～3mmと狭く，花序はまばらで，果実は鮮やかな瑠璃色。日当たりのよい場所を好むツルボ（2018年8月号で紹介）の葉も細く，葉の枚数は少なく，花は径7mmと小さく雄しべがよく目立つ。

＜一言うんちく＞

木陰にひっそりと咲くヤブランですが，ヤブランに含まれるアゼチジン-2-カルボン酸という物質が，他の植物の生育を阻害する効果が高いことが報告されました。花言葉にあるように「忍耐」「謙虚」だけでなく，他の植物に負けないしたたかさも持ち合わせているのですね。

穂状に6弁花を多数つける

＜人との関わり合い＞

夏から秋の長い期間に穂状に咲く淡紫色の花を楽しむだけでなく，年間を通じ濃緑で丈夫な植物のため，「ノシメラン」の名で古くから庭園などに観賞植物として利用されてきた。近年ではガーデニング素材としても人気があり，白や斑入りの葉など品種も豊富である。また，ジャノヒゲと同様，肥大した塊根を水洗いし天日で乾燥させたものは漢方で「麦門冬」と呼ばれ，高血圧や鎮咳，解熱，滋養強壮などに効くとされる。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：初秋】※万葉集で詠まれる「山菅」はヤブランやジャノヒゲを詠んだものともされている。
山川の水蔭(みかげ)に生(お)ふる山菅(やますげ)の　やまずも妹は思ほゆるかも　（柿本人麻呂：万葉集）
衣熨斗目蘭祝のこころは紫に（後藤比奈夫）　　雁のわが家わたりぬ熨斗目蘭　（岡井省二）
藪蘭のうすむらさきに長命寺（山尾玉藻）　　門までの藪蘭につぶやいてゐる（折井紀衣）

分布：全国

ジュンサイ　（スイレン科）

学名：*Brasenia schreberi*（ブラセニア シュレベリ）

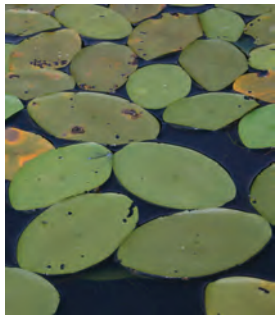
蓴　菜　　別名：ヌナワ(沼縄)、ぬなは、ネヌナワ(根沼縄)、みずどころ、馬蹄草

主な生育場所

多量の腐植質を含み、水色が褐色を帯びるような腐食栄養または栄養塩が少ない貧栄養な湖沼やため池に生育。ときに中栄養な環境にも見られるが、富栄養下では生育しない。流水中にも生えない。

特　徴

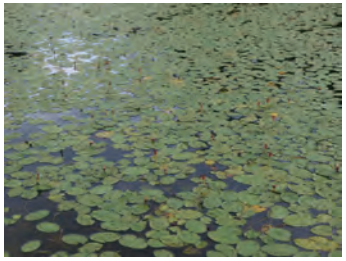
多年生の浮葉植物。やや堅い地下茎が地中を匍匐し、節から葉柄を伸ばしその先に盾状に長さ5～15cm、幅3～8cmの楕円形の葉をつける。葉裏は赤紫色。若芽や葉柄、葉の裏は透明な寒天質の粘液に覆われる。夏に葉脇から花柄を延ばし、先に径約1.5cmの暗赤色の花を水面上に咲かす。果実は細長く、1～1.5cmほど。



名前の由来：漢名「蓴」の発音「チュン」がなまって「ジュン」となり、水菜なので菜をつけてジュンサイ。また別名は、茎が縄のように長くてぬるぬるすることから滑る(ぬめる)縄、略してヌナワ。

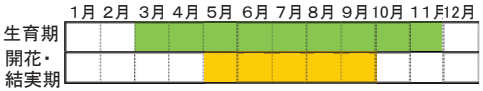
＜農業との関係＞

独特のぬめりを持つ若葉や茎は日本料理の食材として利用され、湖沼だけでなく水田や休耕田で栽培されることもある。とくに水温が低い東北地方の秋田県、青森県、山形県で生産量が多い。栽培は水田を掘り下げ60cmほどの水深を保ち、6～7月に苗を植え付け、3年目以降の6～8月に若芽を収穫する。
なお、食害する害虫にはジュンサイハムシやトラフユスリカなどが知られている。



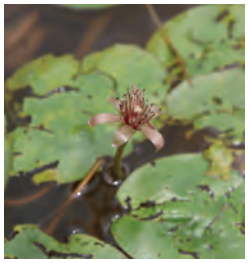
ジュンサイとヒツジグサが混生する池

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



1年あたり　1　世代

＜類似種＞　湖沼で混生することもあるオヒルムシロやフトヒルムシロの浮葉は葉端から葉柄につながる。また、ジュンサイと同様に葉柄が盾状につくヒツジグサ(15年7月号で紹介)やマルバオモダカ、アサザなどの葉の基部は大きく切れ込んでいる。



淡い暗赤色の花披片6枚の花

＜一言うんちく＞

京言葉で「じゅんさいなお人やわぁ」とは、どちらつかかずでつかみどころがない人を遠回しに指す場合に使うようです。一方、ジュンサイは除草剤の影響を受けやすく、除草剤の含まれた用水が混入すると枯れてしまうため、水質のセンサーとしては、とてもはっきりした水草なのです。

＜人との関わり合い＞

若芽はガラクトマンナンを主成分とする寒天質に覆われ、独特の風味が食材として珍重されてきた。各地の産地では若菜の瓶詰めなどが販売されている。若菜は軽く水洗い後、湯に通し冷水で締め酢の物や、吸い物・味噌汁の具、天ぷらなどで楽しめる。また、乾燥した茎葉には解熱や利尿作用もある。浮葉や葉柄の生のしぼり汁は腫れ物にも効くとされ、各地で利用されてきた。しかし、池沼の開発や富栄養化などで各地で消え、現在26の都府県で絶滅危惧種に指定されているほど減少している。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：夏】
わがこころ　ゆたにたゆたに　浮きぬはな　辺にも沖にも　寄りかつましじ（万葉集・作者未詳）　※ぬはな＝ジュンサイ
蓴菜や一鎌入るる浪の隙　（広瀬惟然）　　青田より水の高さや蓴（じゅんさい）沼　（高浜虚子）
蓴菜を　掬へば水泥　掌にあまり　照り落つるなり　また沼ふかく　（北原白秋）

分布：北海道を除く全国

アゼトウガラシ　（ゴマノハグサ科）

学名：*Vandellia micrantha*（ヴァンデリア ミクランタ）

畦唐辛子　　別名：とくになし

主な生育場所

水田や畦畔，やや湿った畑地などに生える。河川敷や湿地環境などにも見られるが，耕地周辺でよく見かける。明るい湿地を好み，背の高い草に被陰されるとなくなる。また，少々の冠水にも耐える。

特　徴

高さ10～20cmほどの小型の一年草。茎は四角形で無毛。株元でよく分枝し，直立または斜上する。縁には2～4個の低い鋸歯がある葉は対生，狭卵形。上部の葉脇から5～20mmの花柄を伸ばしに約1cmほどの淡紅紫色の唇形花を単生する。萼は深く5裂し萼片の先は尖る。果実は線状狭卵形で熟すと萼より3～4倍の長さとなる。

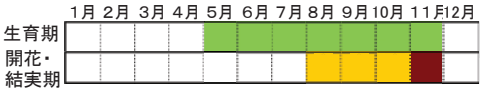
名前の由来：水田の畔など湿っぽい環境下でよく見られ，果実の形がトウガラシの果実に似ていることから，畔唐辛子。

＜農業との関係＞

かつて水田でよく見られた雑草だが，暗きょ等が整備され乾田化が進んだ水田では見かけることが少なくなった。小型の雑草であり，田植え直後からではなく，やや遅れて発生し，中干し期以降に目立ってくるので，イネと競合しにくく害草となりにくい。しかし，アゼナ類と混生して大群落を形成すると，収穫時にコンバインを滑らしたりイネに絡んだりして，作業効率を下げることがある。

花は白に近い淡い紅紫色で花柄の先に単生する

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



1年あたり　1　世代

＜類似種＞　エダウチスズメノトウガラシやヒロハスズメノトウガラシの葉の幅はアゼトウガラシよりも広く，鋸歯も多く鋭い。アメリカアゼナ(18年7月号で紹介)やタケトアゼナの葉脈は3～5本の平行脈となる(アゼトウガラシの葉脈は中央脈が目立つ)。

若い果実。萼よりも長く伸びる
熟すと萼長の3～4倍となる

＜一言うんちく＞

水田周辺でよく見られるアセトウガラシは，稲栽培に伴って古い時代に日本に渡ってきた史前帰化植物とされています。乾田化の進行やアゼナ類によく効く除草剤の登場等により，近年，各地で減少傾向がみられ，長野県では絶滅危惧種にも指定されるほど見かけなくなっているようです。

＜人との関わり合い＞

稲作とともに渡ってきた古くから馴染みのある植物だが，アゼナ類などよく似た仲間と同様に小型かつ地味でさほど邪魔にならなかったことから，これまで積極的に利用したり，注目されてきたことはなかった。しかし，その特徴的な果実の形から「アゼトウガラシ」と呼称し，よく似た仲間と区別してきたことなどからは，田の畦に見られる小さな草花に対しても，農家の方々は目をとめ，よく観察してきたことがうかがわれるだろう。なお，「トウガラシ」と名につくが，毒は無いが果実も含め食用には適さない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：不明】
アゼナ類など水田やその周辺でよく見かける他の良く似た仲間も含めて，これまで詩歌などに登場したことはないようである。目立たない植物であるが，淡紅紫色の小さな唇形花やトウガラシに似て長く伸びる果実など，よく見るとそれなりに趣があるので，もっと目をとめてもらいたい「推し」の草花の一つである。